

〔論 説〕

異文化理解教育作成の必要性，作成とその検証

酒 井 志 延
朱 瑛
山 崎 聡
小 黒 岳 志
サミュエル ギルダート
白 土 さゆり
加 藤 澄 恵
野 川 浩 美
吉 田 由美子

1. 異文化理解教育の必要性

1.1 グローバル化とはどういう現象なのか

COVID-19のパンデミックによって一時的に国境封鎖はあったが、ワクチン接種の普及とともに、東京オリンピックが開催されたりして、グローバル化(globalization)は、息を吹き返しつつある。今回のCOVID-19のパンデミックは、ワクチンの開発や供給において国を超えての協力が欠かせないことを示した。

ここでグローバル化とは、ボーダーレス化による物、人、知の交流が拡大して、相互作用することであるといえる。そして、この流れは技術革新が続く限り止まることはない。日本の社会のいろいろな局面にも押し寄せてくる。その波が早く来る分野とゆっくり来る分野がある。しかし、全体的には、遅かれ早かれグローバル化の波に飲み込まれ、生活様式や意識の変容が迫られることになる。我々が指導する学生はすべからず我々が住んでいる社会よりもグローバル化した社会に生きていくことになる。そのような社会では、文化の違う人を理解する能力が必要であろう。文化の違う人に出会うと「自分が当たり前だと思っている」前提が違うことが多い。自分の前提を疑う必要があるということをしちんと理解することが重要である。自分の常識が当たり前だと思っているだけだと見えるものが限られてきてしまうのである。本稿では、その異文化理解能力を養成する教育を行うにはどのような条件が必要なのか考察する。

まず、現在の私たちの生活や教育に影響を与えているグローバル化とはどのような現象なのか定義を確認しておこう。コトバンクで調べてみると、『知恵蔵』では、「交通機関の発達による国境を越えた人々の移動、政治経済分野における国家関係の緊密化により、様々な領域の問題が多くの国を巻き込んで地球規模に拡大している事態を表す」とある。『デジタル大辞泉』の解説では、「国家などの境界を越えて広がり一体化していくこと。特に、経済活動やものの考え方などを世界的規模に広げること」とある。『百科事典マイペディア』は、「物事が地球規模に拡大発展すること」と記載している。『大辞林 第三版』の解説は「世

界的規模に広がること。政治・経済・文化などが国境を越えて地球規模で拡大することをいう」である。共通するのは、問題や物事が地球規模に拡大するという記述である。

では、このグローバル化に対して、主に英語担当の外国語教員はどう考えているのだろうか。酒井は、2013年にJACET第52回国際大会のポスターセッションの85プログラムの発表者にインタビューとメールで調査を実施した(酒井, 2014)。調査項目は5項目で、その中に「Q1. あなたの大学はグローバル化をどのようにとらえていますか。国際化と比較して答えていただけますか」というものがあった。すると、51名の回答者の39名の意識にグローバル化は、世界標準に合わせ世界の仲間となるという考えがあることが明らかになった。つまり、辞書や事典の定義と大学教員の答えは、ほぼ差はないと考えていい。この調査で比較対象になった国際化について、西(2018)は、「『国際化』においては『国家』『国境』というものが厳然としてあり、それがとりわけ重要な役割を果たしていることである。その上でそれを超えて、ヒト・モノ・カネ、あるいは政治的・文化的交流が行われるのが『国際化』である」と述べている。

この2つの言葉の使用頻度を『朝日新聞 聞蔵II』で調べると、2000年以前は、圧倒的に「国際化」の方が多く使われていたが、2005年から2013年まででは、「グローバル化」の方が使われるようになり、2013年では、「グローバル化」の使用が「国際化」の使用の約2倍になった。新聞に見ることができた現象は、この間の技術の発達、世界との関わりで人々の意識を変えたと言えるであろう。ここで、もう一度整理する。「国際化」とは国の伝統や習慣を残しながら、異文化を持つ人、事物、制度を受け入れるが、基準はあくまでその国にある。それに対して、「グローバル化」は自社会の多くの考えや制度を世界標準に合わせ、世界の仲間となることである。この2つ言葉の違いをスポーツで例えると、相撲と柔道がその2つの例として相応しいと推察できる。共に日本生まれのスポーツだが、両者では立ち位置は大きく異なる。相撲は外国人力士を認め、また日本人の競技人口が減っていることもあり、その活躍が目立つ。しかし、相撲は、日本に基盤に置くので、モンゴルなど外国出身の力士が優勝しても演奏されるのは『君が代』である。一方、柔道は世界に普及させるために、青色の柔道着やポイント制など日本人が考えもしなかったシステムが採用されている。その結果、世界中で愛好されるスポーツになった。柔道はグローバル化したと言える。つまり、グローバル化とは、単に英語ができるようになったり、外国人と交流したりすることではなく、世界の人や物事と入り交じって、相互交流することと考えていいであろう。

1.2 国際化やグローバル化がもたらす意識の変化

では、国際化やグローバル化が進行すると、人々の意識にどのような変化をもたらすのであろうか考えてみよう。国際化やグローバル化の原因としては、航空機や情報技術の発達により、多地域で人々や文化の交じり合いが起きることがある。そうすると、善いことだけでなく悪いことも交じり合うことになる。そのことを日本史で見えてみる。まず善いことであるが、日本社会の近代化を促進してきたものは、外国の基準の採用であることは間違いない。明治以降、日本に無かった科学・医療技術は外国からの一方的な取入れである。寺子屋・藩校の教育、和算、十二支をつかった時刻表示、太陰暦、尺貫法等は廃止され、欧米方式が取り入れられた。その結果、科学技術の取入れは日本を技術立国に、制

度を代えたことは日本を合理的な国にした。しかし、悪いこともある。司馬遼太郎は、「ペリーに続く諸外国の遠洋艦隊は、日本列島にコレラ菌を持ち込んで、幕末、この国際的な伝染病のためにずいぶん罹患者が出たが、同時に日本人に世界の中の自分というものを意識させた」（1997, pp. 31-32）と書いている。この現象は、もちろん現代にもある。難民問題がそうだ。大量の難民と定住先の住民との交じり合いは、定住先の文化の多様性を加速させるが、ヨーロッパなどでは、テロなどが起きやすくなる危険性をはらむ。難民とまでもいかななくても移民による交じり合いもある。

このような交じり合いの結果、世界全体では、グローバル化をもたらす異文化との相互交流は、航空機や通信技術等の発達により今後も進む。その結果、より適したモノまたは、適さないモノが取捨され、世界全体で一つまたは少数の文化や技術に集約される場合や、逆に、多様性が広がる現象を生み出す。前者の例では、大国の文化や習慣が一般化する場合や、便利さなどの機能面が求められる場合に多い。例えば、男性の衣装だが、ビジネスシーンでは、欧米の文化であったネクタイにスーツがグローバルに一般的になりつつある。スマートフォンや家庭用電化製品や自動車なども全世界でほぼ同じ構造に集約されている。外国語教育が英語教育にほぼ収斂されているのは、大国の言語であることにより、地球規模で多くの人が使っているという実用性のためであろう。この観点では、今後、中国語教育も広がると予想できる。そして、情報技術の発達により、ウェブ上の機械翻訳サービスの Google 翻訳では 108 か国語（2021 年 9 月 11 日時点）の翻訳サービスが受けられるし、オンラインの外国語学習ウェブサイトである Duolingo は、30 か国（2021 年 9 月 11 日時点）の言語に対応している。このように、学校で学ばなくてもウェブサイトで、多様な外国語にアプローチできる。

このように機能的や実用性の観点では少数のものに集約される傾向を持つが、集約される必要のない好みなどでは多様性が広がっていく。日本の食卓では、昔のような単調な食事ではなく、多様な食事が一般の家庭でも楽しめるようになった。同時に、モノや制度の採用だけでなく、地域に外国籍の人が増え、彼らと接する機会も生じることから、異文化理解をする意識や共生する意識が必要になってきた。そういう意識の養成には、いろいろな教科で可能であるが、中学校の学習指導要領（文部科学省 2017, p. 129）の目標の（3）に「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」とあり、高等学校の学習指導要領（文部科学省 2018, p. 87）では、第 1 款目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」とあるので、外国語教育が大きな役割を担っていると言える。

しかし、身の回りに自分と異なる人が増えると、入り交じることを嫌う人が目立つようになる。昔はあまり聞かなかったヘイトスピーチは法律で規制しなければならないまでになった。「天声人語」（朝日新聞、2018）も入り交じりを嫌う例を紹介している。「赤池議員『友達に国境がな〜い！』」にかみつぐ 2015 年に公開された『映画ちびまる子ちゃん イタリアから来た少年』は文部科学省がタイアップし、全国の学校にポスターを配った。外国の子どもと仲良くなる物語ゆえだろう、『友達に国境はな〜い！』とある。その表現にかみついた国会議員がいた▼彼はブログで「私は、このポスターを見て、思わず仰（の）

け反りそうになりました」と書いている。「国家意識なき教育行政を執行させられたら、日本という国家はなくなってしまう」のだそうだ。文科省の担当課には猛省を促したという▼子ども向けの宣伝文句も見過ごすことなく、国家意識の危機をかぎつける。鋭敏な感覚の持ち主なのだろう」と紹介している。この人のような人は国境を越えての入り交りを嫌う人なのだろう。また、スポーツの日本代表選手に混血の選手が選ばれることも見られだした。その結果、バスケットボールの八村塁選手も人種差別的なメッセージが頻繁に送られてくることを述べている（毎日新聞, 2021）。

ただ、このような拒否は、特別変わったことではない。人間は好奇心を持って新しいものを見たり知らない国に行ってみたりする気持ちもあるが、自分と異なる人とは交じり合わないし、異なるものは受け入れたくないという気持ちを持つ人も少なからず存在する。このような拒否の感覚の根底には、世間はどんどん変わって行くが、自分の身や暮らしは今のままで良く、これ以上新しいモノを受け入れての変化を望まないという気持ちがあると推察できる。このような考えを持っている学生も少なからずいる。ただ、世界を考えると、国際化やグローバル化に向かっていくことは確かである。現在直面しているグローバル化の波は技術革新が続く限り止まることはない。その波が早く押し寄せる分野とゆっくり押し寄せる分野がある。しかし、全体的には、遅かれ早かれグローバル化の波に飲み込まれ、生活様式や意識の変容が迫られる。グローバル化に対応する教育では、その変容に耐えられるように学生を教育する必要がある。

1.3 英語力がつけば異文化理解能力はつくのだろうか。

1.3.1 先行研究からの考察

前述した調査（酒井, 2014）の一項目として、「グローバル時代の言語教育は英語だけでいいのか」を入れた。その結果、回答者の中に多少の温度差はあっても、多くの教員は「英語は国際語だから、英語ができれば、他の文化もわかるので、大学生には英語教育だけでいい」という考えを持っていることがわかった。しかし、他者に対する共感と相互理解が必要なグローバル時代に果たしてそれでいいのだろうか。

前述の調査の回答の中にも「現在アカデミックな分野では英語が使用主言語であるので、英語で読む力があれば世界各国の価値観について理解を深めることもできる…」という意見があった。しかし、大谷（2007, pp. 117-127）は、太平洋戦争前や最中に、英語の達人である菊池寛や英文学界の指導者であった大和資雄が、英米やその文化を卑下する発言をしていることを例として上げ、英語力があるからと言ってそれが異文化理解能力の向上につながるとは言えないと述べている。

大谷が示すように、英語力があれば、異文化理解能力の向上につながるわけではないとしたら、異文化理解能力を教育で養成しなければならない。その点について現在の状況はどのようなだろう。残念ながら、現代では、異文化理解能力の指導があまり実施されていないのではないかと考えられる。表1の高校3年生に対しての調査（文部科学省, 2015）「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか」の選択肢に、異文化理解をしたいという選択肢はないし、それに近いものも無い。かろうじて①, ⑤, ⑥が該当するが、その合計で約50%という状況である。質問を作成した文部科学省に、異文化理解教育を重要視するという考えがなかったと考えていいだろう。

表 1 高校3年生の英語学習に対する意識（文部科学省（2015）をもとに作成）

問い「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか。最も当てはまるものを1つ選んでください」	
① 英語を使って、国際社会で活躍できるようになりたい。	(11.2%)
② 大学で自分が専攻する学問を英語で学べるようになりたい。	(4.7%)
③ 高校卒業後に、海外の大学などに進学できるようになりたい。	(1.4%)
④ 高校在学中に留学して、海外の高校の授業に参加できるようになりたい。	(1.0%)
⑤ 海外でのホームステイや語学研修を楽しめるようになりたい。	(5%)
⑥ 海外旅行などをするとときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい。	(36.7%)
⑦ 大学入試に対応できる力をつけたい。	(18.8%)
⑧ 特に学校の授業以外での利用を考えていない。	(20.6%)

またこの件は、JACET 教育問題研究会が 2012 年に全国の中学校と高校の英語教員（有効回答数 5,658）に対して、「英語教師の成長のための『授業力のめやす』に関する意識」「異文化理解能力の育成についての意識」「自律を促す取り組みについての意識」の3つの分野について実施した調査（中山，2013）からも判断できる。その調査では、外国語教育の中で行われる異文化理解能力の指導能力について、『現職英語教員のためのポートフォリオ（J-POSTL）』にある 8 項目の Can-do 記述文を選んだ。「1. 外国人留学生，移民の子弟，帰国生など文化背景や学習経験の異なる学習者によって構成されたクラスで教える場合，クラスの多様性の価値を理解し，それを活用すること」「2. 生徒に社会文化的な『行動の規範』の類似性と相違性を気づかせる様々な種類の文章，教材，あるいは活動を選ぶこと」「3. 文化，価値観，考え方などが異なる他者を生徒に理解させるために役立つ，様々な種類の文章，教材，そして活動を設定すること」「4. 生徒が自分のステレオタイプの文化観，価値観，考え方に気づき，それを見直すことができるような多様な種類の文章，教材，活動を選ぶこと」「5. 授業外でインターネットや電子メールなどを用いて，英語が使用されている地域，人々，文化などについての調べ学習を支援すること」「6. 学習者に異文化への気づきを促す様々な種類の文章，教材，活動を選ぶこと」「7. 修学旅行，国際交流・国際協力活動の学習結果を評価すること」「8. 異文化に接した時に，適切に対応し行動できる生徒の能力を評価すること」である。その回答を分析した結果，英語のスキルを指導する能力である「授業力のめやす」の Can-do 記述文に比べ，これら 8 項目の記述文に対する回答者の評定が低く，「異文化理解を促す授業実践は課題を抱えている現状がうかがえる」（p. 34）と報告している。つまり，教員にも学習者にも，異文化理解のために外国語学習をするという目標が理解されていないというのが現状と言えるであろう。そうすると，英語力をつけると同時に異文化理解について意識的に指導することも必要であるといえるであろう。

2. 本学の学生の意識

では，異文化を理解する教育をすることと外国語の動機付けとは関係するのだろうか。酒井は，英語の授業を中学校・高校と，すでに 6 年間受けてきて，基礎事項をあまり習得できないで，英語学習に意欲と関心を持たない学生をどのように指導すべきかと長年悩んできた。英語が苦手な学習者をよく観察すると，英語そのものにも関心がないが，言葉遊

びや外国の文化、ひいては外国旅行にも関心がない者が多い。有元(2011)は、「最近、若者が外国に興味を失い、内向きになってきた」と述べている。この傾向は、最近でも変わっていないと思われる。であるならば、若者は自分からなかなか外に目がいかせない。酒井が青春を過ごした時代は、米国や英国の文化には開放的なイメージがあった。一方、現代の日本の文化は、世界的に見ても引けを取らないものになり、日本の製品に囲まれていけば、心地よい生活が送れる。洋画も吹き替えで見ることができし、日本の音楽も洋楽を聞かなくてもいいほど多様になった。ジェフリー・アーチャー(2010)はインタビューに答えて、「私の本が日本で売れなくなったため、事情を調べてみた。すると(同様に外国人作家である)ステイブン・キングもジョン・グリシャムも売り上げを落としていることに安堵(あんど)する一方、日本の停滞が心配になった。日本人は時間に正確で組織に強みがあったが、変化への柔軟性に欠けるところがある」とコメントしている。また、2013年2月の新潮文庫の電車の中吊り広告には海外の小説は1冊もなかった。2020年2月の新刊案内にもなかった。日本で外国文学が読まれなくなっている。つまり、社会が多様化しているにもかかわらず、外国文学に人気なくなったことは、異文化理解が教育されてこなかったことも影響するのであろう。つまり、日本が内向きになっているのではないか。そのことについて、スプツニ子(2020)は、インタビューの記事のタイトルに「まだ男性優位な内向き日本 はみ出し済みのスプツニ子!」と付けて、「外に意識が向かないと、日本はどんどん排他的な社会になっていくと思います」と述べている。つまり、外国語教育を行うのであれば、異文化理解能力養成の必要があるであろう。大学入試や検定試験対策のために、英語学習を行ってきた学習者は、前述の文科省の英語学習の意識調査でもわかるように異文化理解能力を育てられていない。そういう状態では、異文化理解のために外国語を勉強するという目的は、あまり学生を高揚させない。だから多くの大学においてTOEIC等の試験で動機づけをする授業が蔓延している。

しかし、異文化について指導すると、学生の認識は変化する。2019年7月に、ある私立大学の英語関係学部の受講生43名に「日本における複言語主義のすすめ」(酒井, 2018)を読ませ、自由記述で感想を書かせ、その感想から、価値観を変えたと思える回答(自由記述なので複数のキーワードを記述した回答があった)の代表例を挙げる:異文化理解(29人);(代表的な回答)外国語を学ぶ上で重点を置くポイントは、異文化理解力を養成するということに共感した。複言語主義(13人);(代表的な回答)異文化理解として他言語を学ぶ人が世界中に増えれば、世界はもっと良くなる。価値観の押し付け(8人);(代表的な回答)英語以外の言語は必要ないと思っていた。プレッシャー(3名);(代表的な回答)英語ができなければならぬという固定観念があったと気付いた。このように、複言語主義の考えに触れされただけで、将来グローバル化社会に生きていくことになる大学生は、異文化理解能力と、英語だけでなく複数の外国語の学習の意義も認めた。このように、ある程度、教員が異文化理解を指導する必要がある。

さて、本学の学生の意識に戻るが、英語圏文化についての授業を日本語で実施したら、英語学習に関心を高められるのではないかという仮説のもと、ある授業にてアンケートを実施した。

授業は、『イギリスの文学と文化』であり、内容は「ギリシャ神話」、「シェークスピア」、「ブリティッシュ・ロック」である。2009年の最終授業の時に、出席者188名に対して、

「この授業を受けて英語を勉強したい気になったか」という調査を「1 まったくならなかった」、「2 あまりならなかった」、「3 変わらない」、「4 少しなった」、「5 かなりなった」の5件法で調査を実施した。その結果は表2の通りである。

表2 英語の関心を高める授業の調査結果

	人 (%)
1 まったくならなかった	0 (0.0)
2 あまりならなかった	2 (1.1)
3 変わらない	39 (20.7)
4 少しなった	81 (43.1)
5 かなりなった	66 (35.1)
合計	188 (100.0)

この結果を見ると、この授業は、英語を勉強する気にさせることには成功したと言える。外国語学習は、だれにでも必要だと考えるが、異文化に興味がないし、外国語学習は嫌だという大学生に、関心や興味を高めずに、必修だからと無理やり外国語を学習させても効果がないのではないだろうか。

3. 本学において PC 必携化と 105 分化での授業

多くの大学で授業時間が100分または105分程度になってきている。これに対しての調査は無いので、筆者の見聞きする範囲でのコメントであるが、従来の90分を持って余している教員が少なからずいる。外国語の授業の適切な時間についてだが、大学教育の研究者である山内(2016)は、「イェール大学の時間割では、語学は50分です。何故50分かと聞いたら、『集中力が続かないから』と言われました」(位置 No. 850/1985)と述べている。また、山内は「フィリピンのパーベチュアル大学の授業は、通常は60分、実習は90分」(位置 No. 781/1985)と記載している。また、筆者(酒井)は、2006年にカナダのリジャイナ大学とカルガリー大学のESL講座を視察したが、その大学の講座も50分であった。そう考えると、外国語の授業は、50分から長くても60分程度が適切であろう。すると、現在の外国語の授業の方法では100分程度多くの学生の集中力を保つのは容易ではないし、さらに時間を持って余す外国語の授業が増えることになりかねない。そこで、自分の勤務校で、2020年度から、授業時間が105分になるのに合わせて、1年生の外国語の選択必修授業で、以下のような授業改革を提案することにした。つまり、105分の内60分は従来の授業を行っていただき、残りの45分に関して、専任教員が中心となって、非常勤の先生と討議し、適切な指導が可能な指導案を作成する。各先生はその指導案を必ず使わなければならないことはないが、使うことが奨励される。しかし、2020年度の春学期は、covid-19のためにオンデマンド授業になったので、先生方の負担を減らすためと、授業案に基づいて、オンデマンド授業で可能な教材を作成することにした。

45分を効果的に使うための指導案は3パターンである。機械翻訳で指導するパターン、

異文化理解を指導するパターン、エッセイライティングを指導するパターンである。本稿では、異文化理解に関する指導について記述する。異文化理解の指導では、「自己文化中心から脱却し、文化の違う人を理解する能力の基礎的な養成」をめざす。異文化理解の授業では、体験的な学習が必要であるといわれるが、1年生の英語の時間の中での指導に体験的な学習を入れるのは難しい。では、知識中心の授業では意味がないのか。酒井は、3、4年生に対して、受講生数が多いので、体験的な指導を行えず、知識だけの「異文化理解論ⅠⅡ」の授業を行ってきたが、その中のコメントに「視野を海外に向けてみると、私にとって今までの普通が普通でなくなって行く気がします」とあったし、授業アンケートの結果でも多くの受講生が知識だけの授業でも肯定的にとらえているので、1年生に対して知識だけの授業でも異文化理解に関する意識を変える授業は可能であると考えた。

4. 異文化理解の教材を作成

4.1 回数と種類

2020年度の春学期と秋学期が始まる前に、本学の英語Bの授業を担当する先生が使用でき、学生がコンピュータを使って学習できる教材を4種類、1学期の授業が12回として（各学期の最終授業である13回目は、成績の解説などまとめとして各教員が使用できる）、通年で24回分の授業で使用が可能となるように、年間では96種類の教材の作成することにした。この教材は、各教員の教育観によりすべて使ってもいいし、取捨選択して使用してもかまわないとした。すべての教材は、Teams上に置き、外国語を担当する教員はだれでもアクセスできるようにした。

4.2 方針と大まかな内容

研究代表者の酒井は、本学で10年以上にわたり、「英国の文学と文化」「異文化理解論Ⅰ」「異文化理解論Ⅱ」を10年以上にわたって教授し、「米国の文学と文化」の授業も5年教授した経験を持つ。その経験をもとに、英語Bでの使用を勧める異文化理解の教材では、3種類の教材を考えた。

4.2.1 異文化理解の教科書として『世界の英語 ハンドブック』を用いた授業

学生が中学校及び高校で学んできた英語に関する知識を補完、深化、統合できるように、英語とはどんなものか、英語の語法、ことわざなどの英語圏の文化などを、酒井が著作権を有する『英語の世界 ハンドブック』から内容を選択し、クイズアプリであるKahoot!を使って、クイズ方式で学ばせることにした。その作成は、酒井と山崎が担当した。また、心に響く名言や名文句を英語で紹介した。これは、酒井が過去に別の授業で、名文句を紹介すると、自分の状況に照らし合わせ、「勇気をもらえた」というような反応が学生からあったので、ヘレン・ケラー、ガンジー、エジソンなどの偉人の名言や名文句を紹介し解説することにした。良い言葉には、人の心を鼓舞する力がある。せっかく大学に入ったのに、すべてオンラインになってしまい、沈みがちな1年生を英語の言葉で励まそうとする意図があった。同時に、英語の言葉で励まされることも理解させたかった。

4.2.2 パワーポイントのスライドに写真と解説を載せ、外国事情を紹介する教材

観察からだが、異文化に興味のない学生は、外国の文化や建物風景の面白さを知らない
ので興味を持たないことが多い。そこで、著作権違反にならないように各作成担当者が所
有しているか、著作権がクリアできている写真を使って、各回、10枚程度のパワーポ
イントのスライドで外国について紹介する教材を作成した。順番は、アメリカを最初にした。
これは、ほとんどの学生が外国と言えば、アメリカと思い込んでいるからであるし、アメ
リカは、ヨーロッパ諸国に比較し、ニュースや過去に学んだ教材で、人名や地名などにな
じみがあることから、観光を超えた内容を紹介ができると判断したからである。それから、
ヨーロッパ諸国の紹介になるが、ヨーロッパは一般的に学生になじみが無いので、観光案
内の内容から紹介することにした。その後、英国に入る。英国は、ヨーロッパとアメリ
カの両方に似ているので、この順番が妥当と判断した。その次に、イタリアを取り上げた
が、それは、文学作品で学生に知名度が高い『ロミオとジュリエット』や、ヴェニス、そ
してローマと学生に「海外旅行に行ってみよう」と思わせる魅力があるためである。それ
から東南アジアに入る。具体的には、下のリストを参照されたい。

4.2.3 TOEIC で英文法のチェックをする教材

異文化理解教育ではないが、文法・語法・語彙の確認とその面の向上を図るために、
TOEIC の問題を毎回5題と解答解説はパワーポイントで作成した。問題は『TOEIC
TEST 430 レベル 文法・語法・語彙』を使用し、出版社から使用許可を取った。春学期
の12回分は、酒井が作成した。秋学期の12回分は、白土が作成した。

4.3 各教材の細かい内容

本節では4.2で概略を紹介した教材の具体的なコンテンツを提示する。

4.3.1 異文化理解の教科書として『世界の英語 ハンドブック』を用いた授業

① 英語の語法、歴史、文化、風習及び英語圏の国に関する基本的な知識：

春学期

- | | | |
|----------------|----------------|---------------|
| 第1回目「名文句」 | 第2回目「和製英語」 | 第3回目「米国の地理」 |
| 第4回目「英国の基礎知識」 | 第5回目「カナダ」 | 第6回目「オーストラリア」 |
| 第7回目「ニュージーランド」 | 第8回目「米国の歴史」 | |
| 第9回目「略語・略称」 | 第10回目「英国の年中行事」 | |
| 第11回目「英語圏の迷信」 | 第12回目「数の読み方」 | |

秋学期

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 第1回目「英語とはどんな言葉か」 | 第2回目「西暦日付の読み方」「英米の貨幣」 |
| 第3回目「英語のことわざ」 | 第4回目「シェイクスピア」「Wales」 |
| 第5回目「欧州連合圏」「言葉と文化」 | 第6回目「英語の語源」「しぐさと文化」 |
| 第7回目「アメリカ英語とイギリス英語」 | 第8回目「アメリカ・カナダのスポーツ」 |
| 第9回目「英国の国民的スポーツ」 | 第10回目「ギリシャ・ローマ神話」 |
| 第11回目「World Englishes」 | 第12回目「英米のロック・ポップス」 |

② 心に響く名言や名文句を英語で紹介：

第1回目は、前項の「英語の語法、歴史、文化、風習及び英語圏の国に関する基本的な知識」で紹介した。

Walt Disney “If you can dream it, you can do it.”

Mother Teresa “Peace begins with a smile.”

Thomas Edison “Genius is 1 percent inspiration and 99 percent perspiration.”

Antoine de Saint-Exupéry “A goal without a plan is just a wish.”

Mahatma Gandhi “The weak can never forgive. Forgiveness is the attribute of the strong.”

第2回目 Michael Jordan “I can accept failure ; everyone fails at something. But I can't accept not trying.”

第3回目 Helen Keller “Be of good cheer. Do not think of today's failures, but of the success that may come tomorrow.”

第4回目 Mahatma Gandhi “An eye for eye only ends up making the whole world blind.”

第5回目 Michael Jordan “Never say never, because limits, like fears, are often just an illusion.”

第6回目 映画 *Gone with the Wind* から “After all, tomorrow is another day.”

第7回目 Mahatma Gandhi “Freedom is not worth having if it does not include the freedom to make mistakes.”

第8回目 Albert Einstein “Strive not to be a success, but rather to be of value.”

第9回目 Mother Teresa “The most terrible poverty is loneliness and the feeling of being unloved.”

第10回目 Arnold Bennett “It's easier to go down a hill than up it, but the view is much better at the top.”

第11回目 Helen Keller “Although the world is full of suffering, it is full also of the overcoming of it.”

第12回目 Mahatma Gandhi “A coward is incapable of exhibiting love; it is the prerogative of the brave.”

第13回目 Helen Keller “Face your deficiencies and acknowledge them; but do not let them master you. Let them teach you patience, sweetness, insight.”

秋学期

第1回目 Michael Jordan “Everybody has talent, but ability takes hard work.”

第2回目 映画 *Forest Gump* “I'm not a smart man. But I KNOW what love is. Mama always says that stupid is as stupid does.”

第3回目 Mahatma Gandhi “You must be the change you want to see in the world.”

第4回目 映画 *Batman begins* “Why do we fall, sir? So that we can learn to pick ourselves up.”

第5回目 Shakespeare ソネット第116番

第6回目 Helen Keller “We could never learn to be brave and patient, if there were

only joy in the world.”

- 第 7 回目 Samuel Ullman “Youth” 前半
- 第 8 回目 Samuel Ullman “Youth” 後半
- 第 9 回目 Helen Keller “When one door of happiness closes, another opens; but often we look so long at the closed door that we do not see the one which has been opened for us.”
- 第 10 回目 Malala Yousafzai ノーベル賞受諾スピーチの一部
- 第 11 回目 Helen Keller “Face your deficiencies and acknowledge them; but do not let them master you. Let them teach you patience, sweetness, insight.”(いい言葉なので、春学期 13 回目を再掲)
- 第 12 回目 Lincoln The Gettysburg Address の最後の部分

4.3.2 パワーポイントのスライドに写真と解説を載せ、外国事情を紹介する教材

春学期

- | | | | |
|---------|-------|---------------------------------|------|
| 第 1 回目 | アメリカ | 時間…タイムゾーン, Daylight Saving Time | 吉田作成 |
| 第 2 回目 | アメリカ | 朝食…豊かさを選択制の考え | 吉田作成 |
| 第 3 回目 | アメリカ | 税…ニックネーム, 通貨の種類, 売上税の各州の税率 | 吉田作成 |
| 第 4 回目 | アメリカ | 車社会…Freeway, ラスベガスなど | 吉田作成 |
| 第 5 回目 | アメリカ | 政治…共和党・民主党, 過去の大統領など | 吉田作成 |
| 第 6 回目 | ヨーロッパ | 挨拶…ヨーロッパを知る, 言語を学ぶ | 日高作成 |
| 第 7 回目 | ヨーロッパ | 宮殿と城…ヴェルサイユ, シェンブルンなど | 日高作成 |
| 第 8 回目 | ヨーロッパ | 砦と壁…砦と城壁都市の壁の持つ意味 | 日高作成 |
| 第 9 回目 | ヨーロッパ | 通貨…統一通貨ユーロの意味 | 日高作成 |
| 第 10 回目 | ヨーロッパ | 祭り…イースター, 仮面舞踏会 | 日高作成 |
| 第 11 回目 | ヨーロッパ | ファストフード…フランス, イタリア, ドイツ | 日高作成 |
| 第 12 回目 | ヨーロッパ | 宗教…キリスト教そしてペスト | 日高作成 |
| 第 13 回目 | 香港 | 現状…歴史, 地理, 中国との関係 | 出野作成 |

秋学期

- | | | | |
|---------|--------|-------------------------|----------------|
| 第 1 回目 | 英国 | 概略説明①…構成, 地理, 略史, ロンドン | 加藤作成 |
| 第 2 回目 | 英国 | 概略説明②…食生活, ヘンリー8世, サッカー | 加藤作成 |
| 第 3 回目 | 英国 | 概略説明③…大英帝国, 大英博物館 | 加藤作成 |
| 第 4 回目 | 英国 | 概略説明④…Wales, シェイクスピアなど | 加藤作成 |
| 第 5 回目 | イタリア | 概略説明…基本情報, ヴェローナ, ヴェニス | 加藤作成 |
| 第 6 回目 | イタリア | 芸術…ローマ, ヴァチカン市国 | 加藤作成 |
| 第 7 回目 | 台湾 | 概略説明①…地理, 歴史, 生活 | Pamela Peng 作成 |
| 第 8 回目 | 台湾 | 概略説明②…台湾と日本 | Pamela Peng 作成 |
| 第 9 回目 | 台湾 | 概略説明③…言語, 中国語と台湾華語 | Pamela Peng 作成 |
| 第 10 回目 | マカオ | 概略説明…歴史, 中国との関係, ギャンブル | 出野作成 |
| 第 11 回目 | シンガポール | 概略説明…歴史, 中国との関係, 多民族国家 | 加藤作成 |
| 第 12 回目 | タイ王国 | 概略説明…歴史, 仏教, アユタヤ | 加藤作成 |

4.3.3 TOEIC についての教材は、異文化理解教育ではないので、本稿での紹介は割愛する。

5. 作成した異文化理解の教材の効果を検証

5.1 一年間を通してこの教材を使った学生の意見から分析する。1つは、授業後に実施した Microsoft Forms によるアンケート調査である。それは、本研究で作成した教材を一年間通して使用しかつ終わりのアンケートに協力してくれた2クラス（合計59名）に実施したものである。

5.1.1 異文化理解の教科書として『世界の英語 ハンドブック』を用いた授業

表3 『世界の英語 ハンドブック』を使った学習は

興味深いものだった	20	33.9%
どちらかというに興味深いものだった	18	30.5%
どちらともいえない	18	30.5%
どちらかというに興味深いものではなかった	2	3.4%
興味深いものではなかった	1	1.7%
計	59	100%

5.1.2 パワーポイントのスライドに写真と解説を載せ、外国事情を紹介する教材

表4 異文化を探す旅をパワーポイントで学習することは

興味深いものだった	31	52.5%
どちらかというに興味深いものだった	10	17.0%
どちらともいえない	15	25.4%
どちらかというに興味深いものではなかった	2	3.4%
興味深いものではなかった	1	1.7%
計	59	100%

5.1.3 授業全体に関して、自由に書かせた個別の感想

(1) 授業全般に関しての感想で異文化理解について言及した回答者は15名いた。

- ・海外への関心が高まり、英語に対する学習意欲が増しました。
- ・多くの異文化に触れることができ、知識も前より身につきました。
- ・英語をやっているという感覚になりやすく、どちらかという海外のことを学びながら英語を学んでいる感覚だったのでとてもやりやすかった。
- ・毎回の異文化理解や TOEIC の Kahoot! は普段あまり触れないところなので新鮮で世界に対する興味がさらに深まったことと文法や表現についても学べました。
- ・異文化理解の学習は知らなかったことがたくさんありとても興味深かったです。

- ・全部面白かったのですが、特に異文化理解の資料が好きでした。海外旅行に行ったことがないので、写真などで行ったような気分になれてまた、行きたい国についての歴史なども学ぶことが出来てとても嬉しかったです。
 - ・異文化に触れるのはとても楽しく学ぶことができた。
 - ・異文化理解ということでそれぞれの国について新たな発見をすることが多かったり、グループワークもあり楽しく英語を学ぶことができたのでよかったです。
 - ・異文化理解パートも知らなかったことが多くあり、勉強になることが様々ありました。自分にとってとてもいい経験でした。一年間ありがとうございました。そしてお疲れさまでした。
 - ・英語を話す国の歴史や文化といった高校などでは習うことのできない知識を得ることができて、とてもよかったと感じている。
 - ・カフトでの異文化理解は楽しいので飽きずに講義に取り組む要因だった。
 - ・異文化理解パートも身近に海外のことを学べてよかったです。1年間ありがとうございました。そしてお疲れさまでした。
 - ・異文化理解パートで色んなことを知れたり、…。
 - ・異文化を学ぶことが出来る授業はこの授業だけだったので、とても楽しかったです。
 - ・旅行に行った先の話とかとても楽しかったです。ありがとうございました。
- (2) 「この授業で、苦手意識が軽減したというニュアンスの答えをした学生」は4名だった。
- ・英語に対して、苦手意識を持っている自分にとって、とても有効であった。
 - ・私は英語が苦手で学習するのも嫌になっていた。そこで先生の用意されていた授業資料の内容で多々救われる部分があった。
 - ・自分は英語はあまり得意ではないですが、少し自信をつける事が出来ました。異文化理解でも、自分の知らない国や文化などをパワーポイントで紹介してもらい、とても行きたいなと感じました。日本と違う文化が沢山あり、同じ人間なのに住む環境や食文化の違いを感じ、驚きが沢山ありました。他にも、グループワークを授業で行ったおかげで友達を作る事が出来ました。とても感謝です。英語の授業が好きになるくらい楽しかったです。
 - ・この授業のおかげで英語を好きになれた。二年生になっても英語の勉強を続けていこうと思う。

(3) その他の回答：

「楽しく学べた」が5名、「わかりやすかった」が9名、主に Kahoot! に言及したものが6名、異文化以外の学習について言及した者が18名、難しかったと回答したものは2名だった。

6. 考察と今後のこと

異文化理解能力では、「入り混じる」「自分とは違う相手をリスペクトする」「外国語に興味を持つ」ことなどの養成が重要である。しかし、今回は、対象が1年生であるので、まず、「他国の文化に興味を示し、さらに知りたいと思うわせること」に焦点を当てた。人間は、他国の文化を見て、自分の持っている文化と異なることを認識することにより、

自己文化中心主義に陥らないことができる。1年生の授業においては、この点が最も重要であると考えた。その考えで作成した教材の評価であるが、表3、表4の結果で、ともに回答者の6割以上が、教材を「興味深い」または「どちらかというに興味深い」と答えていることと、「興味深くない」または「どちらかというに興味深くない」と否定している回答者が5.1%であったことから判断すると、本研究で作成した教材は、学生から好意的に受け入れられたといえる。

また、1年生が受けた授業の最初の60分程度は、英語の授業であり、その後異文化理解の授業やTOEICのクイズと解説が続く。その授業全般についての感想で、15名が、異文化理解学習に対して、興味を持ったことと、様々な知識を持ったことを印象深く書いているのは、この教材の教育効果と捉えてよいであろう。

2020年の4月にオンラインになることが決まったこともあり、異文化理解の教材はすべて5月からの授業に間に合わせるために、数週間で作成せざるを得なかった。そこで、これらの教材を修正する必要があるのかどうかを検討する。本稿では、本研究で作成した写真と解説をパワーポイントのスライドを10枚以上でアメリカ合衆国、ヨーロッパ、英国、イタリア、東南アジア、台湾などを紹介した異文化理解の教材について、同一クラスの13回の授業について、学生が自由に記述した感想から、彼ら彼女らが何を学んだかを分析した。そして、どのような改良をすべきか分析した。受けた授業に対して学生が記述した文をまとめて、13回分KH coderで、学生が記述した頻度の多い語を抽出し、共起ネットワークで作図した。その結果を頻度数の多い共起ネットワークに絞り文章化すると、以下ようになる。この記述は、授業についての感想を書くのだが、授業の内容が3部構成なので、異文化理解は、その1部で、各受講生が書いたのは100字程度である。また、異文化理解のセクションであることが分かるように、「異文化理解」を最初につけた。

第1回目：この教材は、順番も含めて自由に使えるようにしてある。担当した先生は、「3.3.3 写真と解説で、日本と異なる外国事情を紹介」では、春学期の第6回目に実施する予定の「ヨーロッパ 挨拶…ヨーロッパを知る、言語を学ぶ」を第1回目に使用された。学生のコメントの分析だが、図1からわかるように、大きな共起ネットワークは3つである。最初の共起ネットワークは「ヨーロッパについて思うことである」であろう。代表的な意見としては「他の国の文化や風習など全く分からないのでこれから学んでいきたいです」「外国を学ぶ理由とヨーロッパの知らない知識がわかりやすく書かれていました」であった。2番目の共起ネットワークは、「コミュニケーション」と考えられ、代表的な意見は次のようなものであった。「言語は同じような意味でも様々な表現方法があります。さらに言語にはその国の文化や習慣から生まれた言葉もあります。そこで、Google翻訳では必ずしも、場面にあった表現を選ぶことができないのではないかと思います」「ジェスチャーだけで最低限の情報は得ることはできますが得られる情報が少なくなってしまう。英語を学んでおくとより現地についての情報を詳しく得ることができることや翻訳機能を使うより人と人同士で話すことでスムーズにいくので、より楽しむことができるのではないかと考えました」というものであった。3番目の共起ネットワークは「歴史や観光で詳しく知る」と考えられ、代表的な意見は、「ヨーロッパにおいてそんな歴史があるなんて知りませんでした」「ヨーロッパの歴史をほんの少しだけ知れた気がしました。ヨーロッパの建築物はどれも立派で一回観光してみたいという気持ちになりました」など

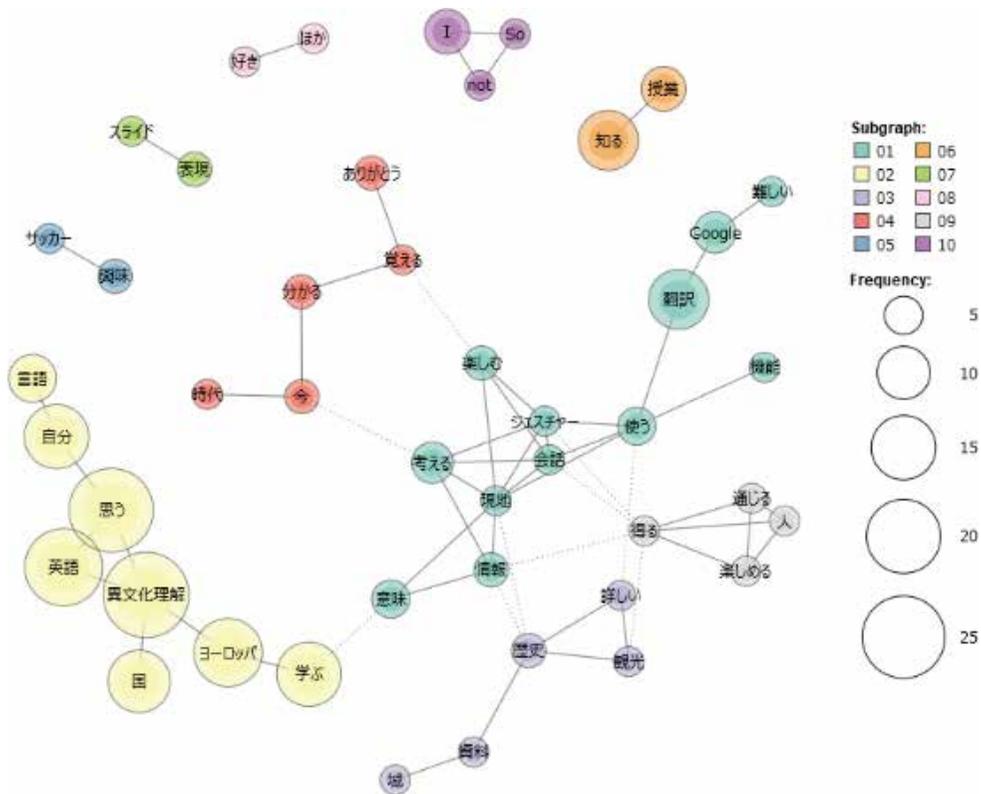


図1 第1回授業の学生のコメント共起ネットワーク図

である。受講生の意見から、この教材は、目的を達成しているといえ、改定の必要性は少ないと言えるであろう。

2回目：担当した先生は、スケジュールに戻って第1回目を実施する予定の「アメリカ時間…タイムゾーン、Daylight Saving Time」を実施された。共起ネットワークで学生の意見を分析した結果、最初の共起ネットワークは「アメリカの時間の考え方が日本と異なること」であろう。代表的な意見としては「国によって時差があるのは知っていたけど、国内で時差があるのは初めて知り驚きました」などであった。2番目の共起ネットワークは、「授業で外国のことを学ぶので興味を持つ」と考えられ、代表的な意見は、「英語と同時に新たなことを学ぶことで興味が増し楽しく学ぶことが出来ました」。3番目の共起ネットワークは、ディズニーランドだった。これは、太平洋タイムゾーンにある建物として、アナハイムのディズニーランドを使い、学生が興味を持ったので、ディズニーランドについて説明した結果、「私は今までディズニーランドは世界に2つしかないと思って調べてみたら6つもあるのですね。全部シンデレラ城の形やデザインが違うのがいいなと思いました」などの感想が書かれた。この第2回目については、Daylight Saving Timeについて説明をしたし、学生のコメントにもあったが、共起ネットワークにはDSTが出現しなかった。DSTは、印象的であるが、他の語と共起していないことを表している。共起せず単独での出現では記憶の定着が低くなるので、他の語との関連を考えるように、教材の

修正が必要である。

このように、13回の学生のコメントを分析した結果、図2からわかるように、第4回の「アメリカ 税…ニックネーム、通貨の種類、売上税の各州の税率」で、なぜアメリカ人がニックネームを好むかを説明し、コインのニックネームを紹介し、売上税が州ごとに異なるかを説明する教材にしたが、学生の「アメリカは州が違くと売上税の割合も違うことには驚きました。とても面白い制度だと思いました」という感想でわかるように、売上税が州ごとに異なる点だけが共起ネットワークに現れる結果となった。改善が必要であるといえる。その他の教材では、「第6回目 アメリカ 政治…共和党・民主党、過去の大統領など」で、党ごとの政策についての共起ネットワークと、共和党と民主党

の共起ネットワークが関連していなかったため、両党とその政策について関連させるように改定すべきでと言える。その他の教材については特に改定の必要を感じられなかった。

また、この授業を担当した一人の教員が、Vogue Japanの「アメリカの学校給食、100年の歴史」<https://www.youtube.com/watch?v=9yZRtd-d88o>の動画を使った。興味深い動画であり、学生もこの動画に対して良い感想を多数寄せていた。今回、その感想の分析はしなかった。この動画の視聴は異文化理解教育に貢献するので、今後カリキュラムに入れてもいいであろう。

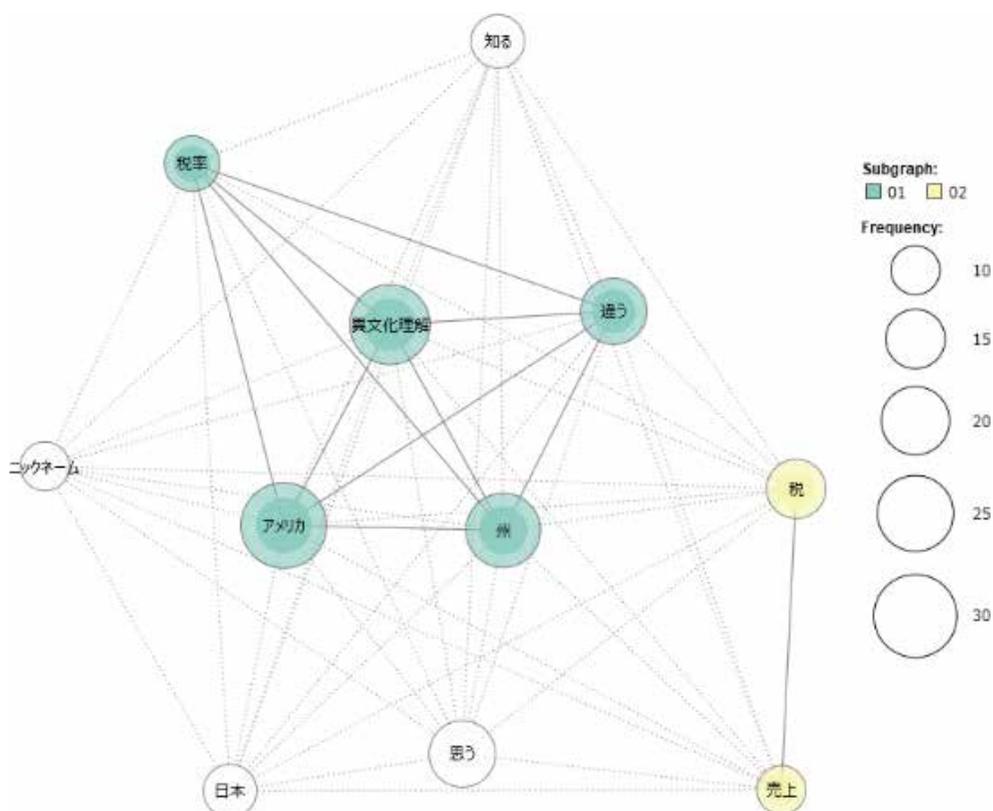


図2 第4回授業の学生のコメントの共起ネットワーク図

7. 終わりに

本研究は、千葉商科大学から学術補助金を頂いて実施した。この補助金があったおかげで、教材を作ってくださいの非常勤の先生にお礼を支払うことができ、非常にスムーズに教材作成が可能となった。

本研究では、機械翻訳と異文化の教材作成が研究目的である。そのデータ量から、膨大になるので、機械翻訳の研究については、昨年度に、「機械翻訳と複言語に関する指導法の開発」商大紀要 58 (2), 1-12, 2020-11 に掲載した。

複言語教育であるが、本稿の最初に「グローバル化では、機能的なものは集約され、趣味的なものは、多様化する」と書いたが、言語教育でもそれが言えるのではないだろうか。機能的な面を持ち集約され、教育で重視される言語は、母語話者が多く、幅広く世界で使用される英語と中国語と考えていいであろう。一方、集約されわけではないが、翻訳の発達により、他の言語の利用も広がっていくであろう。そう考えると、本学において、英語と中国語を主に学ばせ、他の言語も学ぶことができる機会を与えるということは、グローバル化に対応した言語教育と考えることができる。

中国に関する異文化理解教育だが、異文化理解教育として昨年度作成した「写真と解説をパワーポイントのスライドを 10 枚以上」リストに中国の教材がない。これは、中国に滞在している文科省派遣の教員の日本人学校の先生に依頼し、その先生が、この教材の 3 回分の作成を引き受けてくれていて、そして完成したが、文科省派遣の教員の規定で謝礼を外部から受け取ることができないために、本学での使用が不可となった。その不可とわかった時期が遅く、すでに秋学期が始まっていたので、その教材の作成担当が可能な教員はみな忙しく、新しい担当者を探すことができなかった。また、韓国の紹介は引き受けていた担当者が急遽多忙になり、完成できなかったからである。今後、これらの教材を付け加え、中国関係の異文化理解教育も充実させることを予定したい。

〔引用文献〕

- アーチャー, J. (2010). 「老いた二大政党」, 日経新聞, 2010 年 7 月 4 日付朝刊 9 面.
朝日新聞 (2018). 「天声人語」, 3 月 23 日付け朝刊 1 面.
朝日新聞 聞蔵 II. <http://database.asahi.com/library2/main/top.php>. 2013 年 12 月 27 日 DL.
有元舜治 (2011). 「若者の内向き志向, 国際競争力低下～日本社会の仕組みの根本的変革を！」
Retrieved from http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2010&d=0811&f=column_0811_007.shtml 2011 年 1 月 4 日 DL.
コトバンク. 「グローバル化とは」, Retrieved from <https://kotobank.jp/word/%E3%82%B0%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%AB%E5%8C%96-181351>, 2019 年 12 月 27 日 DL.
毎日新聞 (2021) 「八村兄弟に SNS で人種差別メッセージ「バスケうまいだけ」」
Retrieved from <https://mainichi.jp/articles/20210506/k00/00m/040/023000c>. 2021 年 8 月 31 日 DL.

- 文部科学省 (2015). 「平成27年度英語力調査結果(高校3年生)の速報(概要)」, Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou106/shiryo/_icsFiles/afldfile/2015/03/26/1356067_03_1.pdf, 2019年12月27日DL.
- 文部科学省 (2017). 「第2章 各教科 第9節 外国語」, Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf. 2019年12月27日DL.
- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」, https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf. 2019年12月27日DL.
- 中山夏恵 (2013). 「第4節 異文化能力の育成についての意識調査」『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』JACET教育問題研究会.
- 西孝 (2018). 「グローバル化と国際化」, Retrieved from <http://www.world-economic-review.jp/impact/article1005.html>, 2019年12月27日DL.
- 大谷泰照 (2007). 『日本人にとって英語とは何か』大修館書店.
- 酒井志延 (2014). 「グローバル化のための語学プログラムを担当する日本人大学教員の意識に関する研究」, 『リメディアル教育研究』9 (1), 57-68.
- 酒井志延 (2018). 「日本における複言語主義の勧め」, LET Kyushu-Okinawa BULLETIN 18 (0). 1-14. 外国語教育メディア学会九州・沖縄支部.
- 司馬遼太郎 (1997). 『司馬遼太郎全集 第4巻 竜馬がゆく(二)』第8版, 文藝春秋社.
- スプツニ子 (2020) 「まだ男性優位な内向き日本 はみ出し済みのスプツニ子!」朝日新聞デジタル版, 2020年1月14日付, 2020年1月15日DL.
- 山内太地 (2013). 『大学のウソ 偏差値60以上の大学はいらない』角川書店 KINDLE版.

(2021.9.19 受稿, 2021.11.2 受理)

— Abstract —

This paper explores the importance of intercultural understanding education at universities and the creation of teaching materials for it. Students who will live in a globalized society need to have intercultural understanding abilities. Before the start of the 2020 academic year, 96 teaching materials of four types we created to be used by teachers of English B classes that could be studied by students using computers. An analysis of the effectiveness of the teaching materials was conducted using the 5-point method on two classes (59 students in total) that used the teaching materials throughout the year and a questionnaire was conducted at the end of the academic year. It was found that, more than 60% of the students evaluated the materials positively. Next, what students learned about the teaching materials for introducing different cultures was analyzed from the comments they freely wrote for 13 lessons in the spring semester. Responses indicated that there were some points that needed to be revised in the materials for the 4th and 6th lessons, but there was no particular need to revise the other materials.